

過酷な環境における居場所の生成と維持—北海道石狩湾新港・樽川老人会の事例から

清水真輝

キーワード：居場所、環境知、居住、コモニング、戦術

要 旨

本研究の目的は、北海道石狩湾新港に通い続ける高齢者集団「樽川老人会」を対象に、過酷な自然環境と行政的な排除圧力が存在する場所がいかにして「居場所」として成立しているのか、明らかにすることである。一般的な居場所論が前提とする快適性や制度的支援を欠く環境において、なぜ彼らはあえてこの不便な場所を選び、日常的に集い続けるのか。本研究はこの問いに対し、環境の「不完全さ」が高齢者の主体的な介入を可能にしているという視点から、新たな居場所のモデルを提示する。

本稿は7章からなる。第1章では、研究の背景と目的を述べる。既存の居場所論が「安全・安心」を前提としてきたことの限界を指摘し、物理的・制度的に不安定な石狩新港が維持されている逆説的なメカニズムを解明するという本研究の設問を提示する。第2章では、先行研究の検討と分析視座の提示を行う。インゴルドの「居住 (Dwelling)」、ラインボーらの「コモニング (Commoning)」、セルトーの「戦術 (Tactics)」の三つを統合した分析枠組みを構築する。第3章では、調査地の概要と方法について述べる。石狩新港が有する「産業空間」としての厳しさと、そこに通う「樽川老人会」の緩やかな共同体の構造、および筆者が参与観察を通じてコミュニティへ入っていく過程を記述する。第4章では、事例記述として「環境への没入 (居住)」の実践を描く。釣り人たちが竿先の微細な動きや風の音、鳥の鳴き声といった「気配」をいかにして身体で読み取り、環境に没入しているのかを明らかにする。それらが単なるレジャーではなく、環境と共に生きる身体的実践であることを示す。第5章では、戦術・コモニングの実践を描く。外部 (行政・産業利用者) に対してあえて譲歩する「戦術」によって決定的な排除を回避している実態や、内部における除雪費の共同負担、道具や技術の贈与といった「コモニング」がいかに行われ、場を物理的・社会的に維持しているかを明らかにする。第6章では、前章までの調査結果をもとに考察を行う。石狩新港の居場所性は、戦術、コモニングによる場の維持と、環境への没入 (居住) による場の生成という二つのベクトルの循環によって支えられていることを示す。特に、「居住」によって得られる生の実感が、維持コスト (戦術) を払い続ける動機となっているという「生成と維持の循環モデル」を提示する。第7章では、結論を述べる。本研究の設問に対する答えとして、石狩新港が居場所として成立している理由は、この場所が行政による管理が及ばない「不完全な空間」であるからこそ、高齢者自身が秩序をつくり上げる「介入の余地」が残されている点にあると結論づける。快適な施設では「ケアされる客体」とならざるを得ない彼らが、ここでは過酷な環境 (不完全さ) に対処するために、自らの身体と知恵を駆使した実践 (プロセス) を行わざるを得ない。この「自らの手で維持・生成する」という不可欠なプロセスこそが、彼らを「場をつくる主体」へと転換させ、能動的な生の手ごたえをもたらしているのである。

